

Web 公開用研究成果概要

| | |
|-----|-------------|
| 所 属 | 秋田大学 国際資源学部 |
| 氏 名 | 准教授 田所 聖志 |

| | |
|-------|--|
| 研究テーマ | 自然資源から文化資源への意味転換過程についての文化人類学的研究 ：秋田県内ジオパークの比較研究 |
|-------|--|

| | |
|------|-------|
| 関連分野 | 文化人類学 |
|------|-------|

| | |
|---------|--------------------------|
| 対象フィールド | ゆざわジオパーク 男鹿半島・大瀧ジオパーク |
|---------|--------------------------|

| | |
|-------|------------------|
| キーワード | 自然 環境 地域社会 |
|-------|------------------|

| | |
|--|--|
|  <p>八峰白神ジオパーク Happa-Shirakami Geopark</p> <p>男鹿半島・大瀧ジオパーク</p> <p>ゆざわジオパーク</p> <p>Mt. Chokai & Tobishima Island Geopark Plan 鳥海山・飛鳥ジオパーク構想</p> | <p>本研究成果概要は秋田県ジオパーク連絡協議会 による「平成 27 年度秋田県ジオパーク研究助成 事業」公募研究に採択された研究の成果である。</p> |
|--|--|

秋田県ジオパーク連絡協議会

研究成果概要 (A4 用紙で 1 枚程度)

1. 本研究の目的

本研究の全体構想は、地域社会が、地形・地質景観や地質の独自性に由来する鉱山という「自然資源」を、ジオパークというシンボルを用いて新たに観光という「文化資源」へ読み替えていく意味転換の歴史過程の解明である。その中で本課題の目標は、研究の端緒として、ゆざわジオパークと男鹿半島・大潟ジオパークを対象とした(1) 研究の理論的枠組みの構想、(2) 各ジオパークおよび地域社会の現状把握、(3) 関連する論点の気づきであった。

2. 研究調査の方法

本研究では、文献研究と文化人類学の現地調査手法であるインタビューと参与観察を用いる。本課題でのインタビューと参与観察の主な対象は、湯沢市 A 地区および男鹿市 B 地区の住民である(プライバシー保護のため仮名にした)。両地区は、住民の日常生活域の中にジオパークの見学地があるという共通した属性をもつ。両地区に在住在勤の方々のべ 14 人にインタビューを実施し、ならびに地域行事や寄り合いに計 5 回参加して参与観察を行った。また、ジオパーク関連イベントでも参与観察を 1 回行った。

3. 研究調査の結果

(1) 研究の理論的枠組みの構想：先行研究を参照し、文化の客体化論および自然と環境をめぐる語りの多声性に注目する研究という 2 つの議論を組み合わせた枠組みの構築を進めた。

(2) 各ジオパークおよび地域社会の現状把握：両ジオパークとも、過去に外部から注目を浴びた歴史に依拠して観光資源の開発を行っており、その演出では地域の固有性が特に強調されていた。ゆざわジオパークに含まれる院内銀山では閉山後半世紀以上たった現在でも関連行事が行われており、元従業員の関係者も関与していた。対象地域では急激に人口減少が進んでいた。現状を前に、「自分の住んできた地域を残したい」という趣旨の語りが見られた。

(3) 関連する論点：ジオパークに見られる地域の固有性の強調には、地域社会が抱える人口減少という社会状況も関連している可能性があることに気づいた。ジオパーク観光の文脈で使われる場合と地域社会の人々の語りに表れる場合とで、自然と環境という用語の意味する内容が違うことに気づいた。その多声性がジオパークという文化資源の創出にいかに関与するかについて検証する必要のあることが分かった。

4. まとめ

本課題の活動を通じ、地域のもつ自然資源をジオパークという文化資源として発展させる原動力に、地域社会の置かれた社会的文脈が寄与するという視点を一部例証する資料を得ることができた。今後も研究調査を継続し、本研究の全体構想を実現したいと考えている。